

日本の高等教育の国際展開

—成果とこれから



文部科学省高等教育局視学官・大学改革官

佐藤邦明

世界に開かれた大学に向けた経営を

グローバル化の進展や技術革新によって、世界は大きく変容している。高等教育を見ても、世界は政治的に困難な要素を抱えつつも域内の単位互換や人的交流の制度的枠組みを作り、国境を越えて連携や協力、競争を加速し、国力強化と世界調和の動きを拡大している。学生の世界的Mobilityは年々量的拡大を続け、質的にも単なる留学には留まらずDouble/Joint Degree等の共同学位やCotutelle等の共同指導、さらには世界をキャンパスに学生が移動する大学まで登場する等、極めて多様になっている。研究においても、研究領域の拡大とともに国際協働は増えており、研究者コミュニティーも国境を跨いで拡大傾向にある。

国内に目を向けると、予測困難な時代、人生100年と言われる時代において、昨年11月の中教審将来像答申にもある通り、これからはますます「多様性」がキーワードとなる中で、一個人の学びの過程であるアカデミックパスも、キャリアパスも複線的に多様であってよいし、大学生の年齢や国籍も典型層に限らず留学生や社会人等多様であってよい。いや、むしろ多様であるほうがイノベーション創出や多様性マネジメント力の向上という観点からは望ましい。

これらを背景に、経済や環境、食糧や医療等現代社会の諸課題は一つの国だけで解決するのは困難である等、地方創生も含め「国際」は様々解決の糸口となり得るが、多様性・異質性あるものに対する日本社会の耐性や理

解・認識は未だ道半ばであり、少子高齢化による労働力不足と入管法改正を巡る議論等は、まさにそうした状況をよく反映している。

そうした中で、学問の自由を許される大学こそが、知識基盤社会における諸問題の解を導き出すべきであるとの社会的要請は日に日に増している。学術研究に国境はなく、大学は元来多様性や異質なものを受け入れるだけの寛容性を備えている。既存の枠組みや手法、価値観に捉われることなく、人類史を俯瞰し、世界の動きを意識し、新たな時代に求められるスキルを身につけた人材をどう育成し、世界レベルでの頭脳循環をどう実現するかといった視点を持って大学を経営・運営することが極めて重要であり、国の制度についても将来を見据えた変革が求められる。

現在の国際関連施策の現状

我が国の大学では、留学生の受入や送出しの活発化、外国語カリキュラムの充実、海外の研究者の招聘等、国際化に向けた取り組みは総体的には年々着実に進展している。Double Degreeの実績だけ見ても、学生の派遣もしくは受入実績があったのは計351件(国立114、公立6、私立231。平成27年度実績、文部科学省調査)となっている。

文部科学省としても、大学の国際化を不可欠なものとして位置づけ、これまで幅広い支援を展開している。制度的には2014年にJoint Degreeを可能としたほか、補助事業として大学教育のグローバル展開力の強化策、留学

生交流充実のための奨学金等の充実、さらには私学助成においてもグローバルな取り組みが一定程度評価反映されている。

特に国際化支援に特化した施策としては、「スーパー

グローバル大学創生支援事業」(以下SGU)及び「大学の世界展開力強化事業」の2本がある。前者は10年間の事業で中間評価を終えたところであり、後者は日中韓のキャンパス・アジアをはじめ、世界各国地域を戦略的に

表1 ジョイント・ディグリー プログラム開設状況

平成26年11月14日「我が国の大学と外国の大学間におけるジョイント・ディグリー等国際共同学位プログラム構築に関するガイドライン」策定。以後、プログラム開設が進む。現在20専攻が開設されており、14専攻がSGU採択校。

	大学名	学部・研究科	相手大学	相手国	新学科・専攻名	開設年月
1	名古屋大学大学院	医学系研究科	アデレード大学	オーストラリア	名古屋大学・アデレード大学国際連携総合医学専攻(D)	平成27年10月
2	東京医科歯科大学大学院	歯医学総合研究科	チリ大学	チリ	東京医科歯科大学・チリ大学国際連携歯医学系専攻(D)	平成28年4月
3	東京医科歯科大学大学院	歯医学総合研究科	チュラロンコン大学	タイ	東京医科歯科大学・チュラロンコン大学国際連携歯学系専攻(D)	平成28年8月
4	名古屋大学大学院	理学研究科	エディンバラ大学	イギリス	名古屋大学・エディンバラ大学国際連携理学専攻(D)	平成28年10月
5	京都工芸繊維大学大学院	工芸科学研究科	チェンマイ大学	タイ	京都工芸繊維大学・チェンマイ大学国際連携建築学専攻(M)	平成29年4月
6	名古屋大学大学院	医学系研究科	ルンド大学	スウェーデン	名古屋大学・ルンド大学国際連携総合医学専攻(D)	平成29年4月
7	筑波大学大学院	人間総合科学研究科	ボルドー大学 国立台湾大学	フランス 中国	国際連携食料健康科学専攻(M)	平成29年9月
8	筑波大学大学院	生命環境科学研究科	マレーシア日本国際工科院	マレーシア	国際連携持続環境科学専攻(M)	平成29年9月
9	京都大学大学院	文学研究科	ハイデルベルク大学	ドイツ	京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻(M)	平成29年10月
10	名古屋工業大学大学院	工学研究科	ウーロンゴン大学	オーストラリア	名古屋工業大学・ウーロンゴン大学国際連携情報学専攻(D)	平成30年3月
11	立命館大学	国際関係学部	アメリカン大学	アメリカ	アメリカン大学・立命館大学国際連携学科(学部)	平成30年4月
12	名古屋大学大学院	生命農学研究科	カセサート大学	タイ	名古屋大学・カセサート大学国際連携生命農学専攻(D)	平成30年4月
13	京都大学大学院	医学研究科	マギル大学	カナダ	京都大学・マギル大学ゲノム医学国際連携専攻(D)	平成30年4月
14	長崎大学大学院	熱帯医学・グローバルヘルス研究科	ロンドン大学	イギリス	長崎大学・ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院国際連携グローバルヘルス専攻(D)	平成30年10月
15	名古屋大学大学院	医学系研究科	フライブルク大学	ドイツ	名古屋大学・フライブルク大学国際連携総合医学専攻(D)	平成30年10月
16	岐阜大学大学院	自然科学技術研究科	インド工科大学グワハティ校	インド	岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻(M)	平成31年4月(予定)
17	岐阜大学大学院	連合農学研究科	インド工科大学グワハティ校	インド	岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻(D)	平成31年4月(予定)
18	岐阜大学大学院	工学研究科	インド工科大学グワハティ校	インド	岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携統合機械工学専攻(D)	平成31年4月(予定)
19	岐阜大学大学院	工学研究科	マレーシア国民大学	マレーシア	岐阜大学・マレーシア国民大学国際連携材料科学工学専攻(D)	平成31年4月(予定)
20	名古屋大学大学院	生命農学研究科	西オーストラリア大学	オーストラリア	名古屋大学・西オーストラリア大学国際連携生命農学専攻(D)	平成31年4月(予定)

指定しそれら諸外国の大学との先導的教育交流を促進するものとなっている。これまで、ASEAN諸国、ロシア、インド、中南米、トルコ、米国、EU諸国と、各5年間、質保証を伴った連携を戦略的に進め、政府の地球儀俯瞰外交を人的交流の面から支えるとともに、採択延べ

143大学等において約2.3万人もの交流が実現(H23-29実績)している。

SGUの中間評価から見えること ——成果と課題

SGUの意図は、世界に開かれた大学となるための「体質改善」である。G30等過去の事業は相応の成果を上げたものの、一方で国際化の取り組みが出発点に関連部局に限定していたという反省に立ち、大学内の各種制度や組織文化等全体の国際互換性を高め、国際的な競争力も含めた通用性を確保するというものである。

昨年2月に公表されたその中間評価結果を見ると、概ね進捗している。

37大学全体で、外国語による授業科目数は事業開始前と比べ約1.7倍の3万2846科目、外国語のみで卒業できるコースも221増の873コース、多くの大学においてクォーター制導入等の学事暦の柔軟化がなされ、Joint Degreeの導入も本事業採択大学を中心に進捗している(表1)。こうした中、学生の流動性も高まっており、単位取得を伴う海外留学経験者数は約1.5倍の2.4万人、外国人留学生数は約1.4倍の7万人に増加している。

また、トップ型13校に限定してみると、Times Higher Educationの世界大学ランキングの国際スコアが事業開始前に比べ軒並み大きく上昇している。大学ランキングについては単純に真に受けることは控えるべきだが、国際標準を考える際の一参考要素としてこの指標が一律に伸びていることは、採択校の努力が反映されているものとして評価できる。

表2 各国大学における外国人比率(学生数及び教員数)

	日本全体	MIT	Stanford	Harvard	Caltech	Cambridge	Oxford
全学生数	2,890,880	11,145	16,135	22,727	2,239	19,203	20,631
内外国人	267,042	3,732	3,665	5,495	667	7,049	8,005
%	9.2	33.5	22.7	24.2	29.8	36.7	38.8
全教員数	382,518	3,009	4,366	4,542	1,009	5,601	6,564
内外国人	21,772	1,696	2,115	1,383	407	2,749	3,126
%	5.7	56.4	48.4	30.4	40.3	49.1	47.6

(出典) 文部科学省「学校基本調査(H29)」、JASSO「留学生調査」、QS社「QS World University Ranking 2019」

日本の高等教育のVisibilityが高まっていることもその大きな成果と言える。SGU採択大学全体の学生総数及び教職員数は、我が国の大学全体の概ね20%と社会に変革を起こすクリティカル・マスに達しており、相応のインパクトを持って他大学の参考となっている。加えてここ数年、多くの海外の大学関係者から、SGUを契機として日本の大学が世界の大学コミュニティーに積極的に参加するようになる等、Visibilityが高まっているとの声を聞くようになった。

一方で課題として明らかなのが、学生の語学レベル向上である。大学がそれぞれ設定する語学基準を満たす学生数は、一定程度の進捗は見られるものの多くが未だ目標に到達できていない。学生の学習モチベーションを高める有効な学習方法や環境の確立等、大学には一層本腰を入れて進めることを期待したい。

むしろ気になるのは、どこまで真の体質改善が進んでいるかだ。一部の大学では、学長の裁量経費や寄附金等を活用した国際化施策の財政基盤強化と持続性確保や、事業統括部署とIR部門の協働によるガバナンス強化等、国際化対応が組織全体で実質化し始めている例も見受けられる。しかし細部まで見てみると、未だ多くの大学が国際にプライオリティを置きつつも局所的対応に止まっており、組織全体として体質改善が成し遂げられている大学は限定的と言えよう。

本事業の後半5カ年に向けた課題は、それぞれが立てた目標の達成はもちろんのこと、国際通用性ある人事制度をはじめとして大学組織全体に国際Mindを行きわたらせ、職員の高度化を図り、組織の中核的価値として国

際通用性ある業務体制や組織文化を構築することであろう。(参考:表2)

国際展開をさらに加速するために — Sustainableなモデルの構築を

(1) 財源の確保と資源の共有

しかし、国際化にはコストも手間もかかる。留学生リクルート、日本人学生の派遣先との交渉、学内規程の多言語化、国際共同研究支援等々、やればやるほど手間もコストもかかる。SGUやWPI等補助事業には終わりがあり、限られた財源の中では国際に予算を回したくとも困難である場合が多く、事業終了後に向け、いかに持続可能な形で自律的体制を整えるか、特に国際専門人材とその雇用財源の確保について、頭を悩ます大学が多いはずである。

この解決には、受益者負担を原則に必要なコストは国際部門自らが賄う考え方への転換が必要だ。

真っ先に考えられるのは、外国人留学生の授業料の値上げと、サマープログラム等の短期受入留学プログラムの有料化だ。国際的に、我が国の、特に国公立の授業料は破格であり、奨学金や授業料減免等手厚い。短期プログラムも、無料どころかわざわざ奨学金を出して呼び込んでいる例も多い。反対論者は値上げ・有料化後の留学生減少を真っ先に気にするだろうが、それは過渡的には起こり得るが、むしろ値上げによる留学生選抜機能の強化、Reputation向上とブランドの確立、増収分から経済的支援が真に必要な留学生への奨学金拡充やスタッフ

の充実等が期待できるほか、短期プログラムは、日本人学生を積極的に関与させることで多様性マネジメントの訓練機会となるばかりか、世界に対する宣伝効果と留学生の長期受入にも繋がる。また、何よりも価格に見合ったサービス提供のため、教育とサービスの質を改めて世界基準で見直す良い機会となる。

受益者負担として国際関連費用を留学生から徴収することは、国際的にも極めて自然な考え方であり、高等教育の税負担をしている国民の理解も得られやすい。お金を出して来てもらう、お金がないと来てもらえないといった発想では、早晚行き詰まることは明らかだ。

個々の大学を越えたネットワーク活用も、有効策の一つだろう。例えば外国人留学生受入後の各種サービスの提供やリクルート活動については、個々の大学が全てを自前で準備するにはコストも手間もかかりすぎる。例えばタイには50以上の日本の大学の拠点があるが、目的の共通する部分について資源を共有してAll Japanで留学生リクルートセンターを設置し、在外のJASSOやJICA、JETRO等の国の機関と協働することで、効果的、効率的、戦略的な活動が可能となるはずだ。前述の短期プログラム等も、例えば昨今米国トップスクールからニーズの高いインターンシップ付き短期留学プログラムの構築に向け、連携企業の開拓を共同で行うこともあり得る。中教審答申で提言されている「地域連携プラットフォーム」や「大学連携推進法人」等の枠組みを活用する手立てもあろう。

(2) 多様な海外展開策の模索を

「海外展開」は、一見魅力的なアプローチだ。実際、新興国から日本の大学や高専への展開オファーも見受けられる。しかし、その在り方については再考の余地がある。既存の文部科学省の制度上は、外国へのキャンパス設置は可能となっているものの、大学設置基準の厳格な適用や財政負担への懸念等から活用事例は一つもない。また、外国にキャンパスを設置するとなると、国によっては巨額の初期投資を法的に義務づけている例もあり、新興国に見られるようなハードな海外展開には障壁も多い。

一方で、近年では北京大学のビジネススクールが英国オックスフォードにキャンパスを設置したように、新興国ではなくむしろ高等教育先進国に進出することでReputation向上や教育研究力の伸長を図るパターンも見られる。また、昨今のミネルヴァ大学等新たな形態の発生やICT技術の進歩等、世界的な視点から未来の高等教育の在り方を遥か見通したとき、今後は新しいソフトな海外展開へのニーズが様々な出現することも予想される。例えばMOOCsを活用して海外トップスクールとカリキュラムの一部を共有、もしくは学生自身を共有し世界を股にかける等、学生や企業が魅力を感じチャンスと思える展開を大学が積極的に模索し提供することは、新たなマーケット創出という意味でも挑戦する価値は大いにある。

加えて、地球規模での高等教育の在り方をはじめ様々な課題について学会やセクターの枠を越えて世界各国の大学と対話や連携を進める国際的大学リーグの創設を、大学人自らの発意により提案できないだろうか。学長レベルでの定期的対話や国際社会への提言、リーグ内での学生・研究者の積極交流等、アカデミア主導の未来志向の発信は大きなインパクトと意味を持って国内のみならず国際社会からも歓迎されるのではないだろうか。各国政府も様々後押しすることもできるだろう。

(3) 政策的な後押しの重要性

世界では様々な単位互換システムや交流スキームが模索され、またASEMやASEAN+3等の場において政策対話が継続されている。文部科学省も、国内の閉じた議論にとどまることなく、世界各国と調和を図りつつ、ルールメイクの段階から積極的に関与しイニシアチブを取っていくことが必要だ。過去にも、例えば世界展開力強化事業における「AIMSプログラム」については、ASEAN諸国主導のプログラムにASEAN以外の国として初めて参加し、質保証を伴った学生交流の在り方においてルールメイクの段階から制度発展に貢献した。ユネスコの「高等教育の資格の承認に関するアジア太平洋地域規約」については、東京にて採択のための国際会議を開催し、通称「東京規約」として存在感を発揮した。加

えて近年では、ASEAN+3教育大臣会合で承認され各国で活用されている「学生交流と流動性に関するガイドライン」と「留学生の学修履歴のための成績証明書及び補足資料に関するガイドライン」の策定において、我が国は主導的な役割を果たしている。

今後は、こうした国際教育外交の動きと併せて、我が国の大学がより世界に挑戦しやすいような環境について、制度的には質保証は当然のこととして(その際の「質」が何であるかは十分な検討が必要だが)、現行法令の在り方を改めて見直し整備していくことが必要となるだろう。

終わりに — 高等教育の国際化の意味

高等教育の国際化は、大学にとって単なる国際交流ツールではなく、教育研究の質そのものの向上、競争力の向上、ひいては国力の向上にも繋がる最重要事項の一つである。国にとっては、教育交流や科学技術交流による安全保障や世界平和への貢献という使命をも持つ。政治外交的に困難な関係であってもこうした交流は継続される。そして何より、次世代を担う学生や研究者にとっては、これからの時代は世界とより広く深く繋がりをネットワークを広げキャリアを作っていくような多様なパスとそのための機会が必要であり、そうした世界に挑もうとする若手を教育面でも研究面でも支え伸ばすことに国際化の意味がある。個々人、大学、そして政府がそれぞれ国際化を実質的価値として当然のこととし、大学教育と学術研究を通じ各界各層で積極的に世界と繋がり、欧米追従ではない日本だからこそできるルールメイクへの貢献を人類の平和と発展のために成していき、それが我が国の高等教育の国際化の在り方ではないだろうか。

食、文化、スポーツでも世界との接触が新たな価値を創造するように、世界に開かれた大学としてその価値をより高めイノベーション創出や多文化共生を先導していくことが、これからの日本の発展にとって不可欠であり、大学の執行部には、既存の枠に捉われないことなく常にグローバルな関係性の中で大学経営を考えることを期待したい。

